

2025年11月9日 礼拝説教要旨  
 ヨハネによる福音書講解説教59「神の業を信じよ」  
 詩編82：1～8、ヨハネ10：31～42

「わたしと父とは一つである」（10：30）そのようにイエスさまは繰り返しご自身をまことの神さまと一つであると言われます。そのことに対してユダヤ人たちは我慢ならないのです。それが殺意へと向かいます。そしてこの殺意はやがて十字架において達成されることになります。何がイエスさまを死に追いやるのか。これは決して人ごとではありません。イエスさまはわたしたちの罪のために十字架におかかりになられました。この石を投げつけようとしたユダヤ人たとく同じ罪をわたしたちも持っています。

マタイが伝えるクリスマスの物語に占星術の学者の話があります。星に導かれ東方の国からエルサレムにやってきた占星術の学者たちがヘロデ王に尋ねる。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおられますか」とするとヘロデは「不安を抱いた」と聖書に書いてあります。その不安がやがて殺意に変わり、ヘロデは二歳以下の男の子を皆殺しにするという暴挙に出ました。救い主イエスさまの誕生の背後には、すでにこのイエスさまを亡き者とする思いが渦巻いています。それは神さまの到来、新しい王、新しい支配者の到来を歓迎しない人間の罪の表れに他なりません。どうして新しい王の誕生を喜べないのか。それは自分が神になっているからです。自分の立場が危ぶまれる。それが我慢ならないのです。それは今日のユダヤ人たちの殺意とも重なります。もちろんユダヤ人たちは自分たちが神になろうとは考えてもいないでしょう。それが神さまを冒瀆することだと誰よりもわかっているつもりでした。しかし気づかぬうちに、自分では自覚しないところで自分を神にしてしまう。アダムとエバが神のように賢くなろうとして木の実を食べたように、誰も自己神格化の罪から免れないのです。

イエスさまは「あなたたちの律法に、『わたしは言う。あなたたちは神々である』と書いてあるではないか。」（34節）と言われます。ここでイエスさまが引用なさったところは詩編第82編6節「あなたたちは神々なのか。皆、いと高き方の子らなのか」の部分です。イエスさまはここで「神々」と言われる存在をこの世の君候、王と解釈しておられます。王は神さまによって立てられるからです。サウルもダビデも神さまが王として選び、お立てになられた。それが「神の言葉を受けた人」（35節）と表現されています。けれどもその王たちは必ずしも良い王ではありませんでした。それでも聖書で「神々」「いと高き方の子ら」と呼ばれるならば、父なる神さまから聖なる者とされて世に遣わされたわたしが「神の子である」と言ったところで神さまを冒瀆したことになるだろうか、と言われているのです。この世の間違いだらけの王でさえ、神々と呼ばれるのだから、神さまから遣わされ、善い業を行うご自身が神の子であると言ったからとて問題はないという論理です。

もう5年ほど前になりますが、詩編の講解説教をしました。その時の原稿を読み返してみました。この第82編は「神は神聖な会議の中に立ち、神々の間で裁きを行われる」（82：1）という言葉で始まります。まことの神さまが他の神々を告発し裁くという内容です。この「神々」は詩編の成立の背景を考えると、やはりまずは異教の神々を指すと理解することができます。アッシリアやバビロニアなどの強国に攻め込まれ、様々な異教の神々が流入してきます。それらの神々は、神としての役割を果たしていない。偶像なのですからそうでしょう。「弱者や孤児のために裁きを行い、苦しむ人、乏しい人の正しさを認めよ。弱い人、貧しい人を救い、神に

逆らう者の手から助け出せ」（82：3～4））本来そうであるべき神々がそうではない。それを神さまが告発し裁いています。

しかしこれは単に異教の神々だけではないでしょう。聖書学者の関根正雄先生は詩編の注解書で次のような指摘をしています。「人間の世界は今日的に言えばイデオロギーとか、世界観とか、半神的なデーモン性をもったある種の靈的なものに支配されている。否、人間自身がみな小さな神々となって真の神に対し、また人間相互の間であくなき自己主張を続けているのである」人間そのものが神々になるのです。イデオロギーに支配された人間が権力を持つときに何が起ころのか。国家主義、民族主義的野望が生まれます。戦争が起こります。あらゆる差別、偏見、排除が起こります。それは歴史が証明するとおりです。人間そのものが神となり、真の神さまに逆らい、またそのような人間同士、神々同士が権力争いをして、お互いを殺し合う。「彼らは知ろうとせず、理解せず、闇の中を行き来する。地の基はことごとく揺らぐ」（82：5）何を知ろうとしないのか。まことの神さまです。神さまに立ち返らない。だから世界は今闇の中なのです。

けれども、その闇を終わらせるために、イエスさまはまことの光として来られた。イエスさまがこの神々を裁き、不正をあばき、すべてのわたしたちの驕りをあの十字架で打ち碎かれるのです。神さまは世の神々に「あなたたちも人間として死ぬ。君候のように、いっせいに没落する」（詩編82：7）と言われます。でもその裁きを担って神さまの御子がまことの人間となられ死なれました。今日の御言葉でイエスさまは言われます。「もし、わたしが父の業を行っていないのであれば、わたしを信じなくとも良い。しかし、行っているのであれば、わたしを信じなくとも、その業を信じなさい」（37～38節）わたしが信じられなければそれでいい。ここでイエスさまは捨て身になっておられるように思います。わたしは十字架で死ぬ。でもそこに神さまの御業が確実に働いている。イエスさまを通して、神さまの愛の業は始まったのだ。せめてそのことだけは信じてほしい。ここにはイエスさまの切なる思いが込められているのではないかでしょうか。

よく教会では人を見ず、神さまを見てということを言います。人を見るときにわたしたちはそういう神々を作り上げる。牧師を神のように見ることがあります。人を神格化する。その人の能力や人格的なものが人を救うのではありません。それに頼ると必ずつまずきます。しかしおわたしたちの中に働く神さまの御業こそ、わたしたちの内に信仰を引き起こすのです。牧師もいつかは死にます。尊敬するあの人もいつかは死ぬでしょう。でもその人のうちに働くイエスさまの御業はいつまでも残ります。そのようにして信仰は受け継がれてきました。イエスさまの御業は生きています。イエスさまはわたしたちのところに来られ、十字架で罪を贖われ、三日目によみがえられた。そのようにして救いの道を切り開いてくださった。わたしの中にその永遠の救いの御業は生きています。

天の父よ。ともすると人を見て、そこに頼る過ちを犯します。様々な神々をつくりあげてしまいます。そのような誘惑からお救いください。どうかイエスさまを通して、その十字架とよみがえりの御業を通して、始められた神さまの愛の御業を見続けることができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。